

平成二十四年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十五年三月

社団法人 高山市文化協会

序

高山市から委託を受けて実施している「高山市近代文学館調査・研究」事業は、近代において飛騨地域の文化の発展に大きな影響を与えた郷土出身の文学者の足跡と功績について、作品はもとよりその背景や交流のあった文学者など、関係する資料や情報を収集して調査と研究を行い、その成果をより多くの市民の皆様にご理解いただくもので、年二回定期的に展示会を開催するなど、関連の事業を実施しています。

平成二十四年度は、江戸中期から明治時代に活躍した、飛騨にゆかりのある文化人が遺した、俳句・詩・和歌・漢詩・国学・儒学等の「書」をとおして、その人柄や功績について調査しています。

ここでは、現況を報告書へ記載しましたが、これからも資料の収集と調査研究のため、引き続き作業を継続してまいります。

平成二十五年三月

目次

一	津野滄洲	1
二	加藤歩簫	2
三	赤田臥牛	5
四	二木長嘯	7
五	館柳湾	8
六	田中大秀	9
七	加藤孝充	12
八	岩佐一亭	13
九	赤田章斎	14
十	山崎弘泰	15
十一	上木清成	17
十二	富田礼彦	18
十三	森春湧	20
十四	吉住礼助	21
十五	山田秋籟	22
十六	加藤麴翁	23
十七	宮原大輔	24
十八	船坂雅平	25
十九	生井修斎	26
二十	佐藤泰郷	28
二十一	吉島掃月	29
二十二	赤田誠軒	30
二十三	山崎弓雄	31
二十四	山岡鉄舟	32

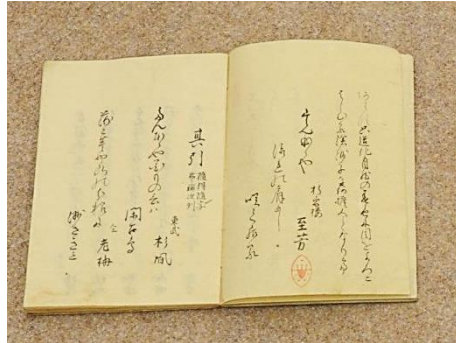
二十五	吉田文助	34
二十六	福田吉郎兵衛	35
二十七	川島小泉	36
二十八	岡村御蔭	37
二十九	田島春園	38
三十	大池真澄	39
三十一	山崎弓束	40
三十二	白川琴水	41
付記		42

一 津野滄洲

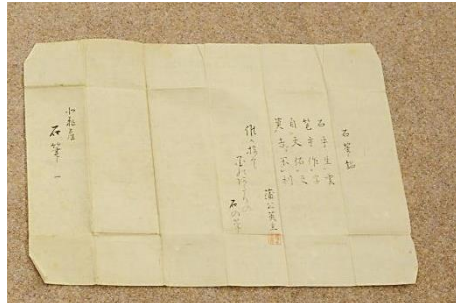
○新年書懷(個人蔵)



○句集蒲公園(個人蔵)



○石筆銘(個人蔵)



つ
の
そ
う
し
ゆ

〔津野滄洲〕

享保三年(一七一八)〜寛政二年(一七九〇)七月二十三日

蚕業功労者・石器収集家・酒造業・糸問屋。高山二之町の人。名は義見。号は蒲公英主・金華主人・金華三愛主・愜徳斎。字は有鄰。通称を福島屋五右衛門。

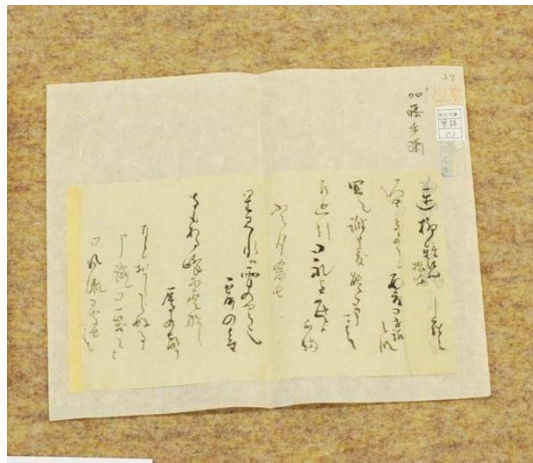
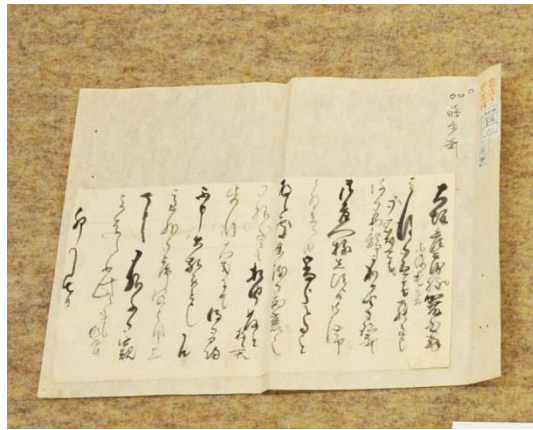
飛驒の蚕業振興のため三河で蚕の飼育方法を習得して帰り、飛驒各地で指導。さらに三河などから蚕種や桑苗を求めて無償で配付。こうした私財を投じた努力が実って、飛驒の生糸と紬の生産額は五十倍以上になる。この功により名字帯刀を許される。詩文、俳句、狂歌をたしなむほか石器収集・研究の草分け的な存在。

著書『金華三愛集』『飛州燕石録』ほか。

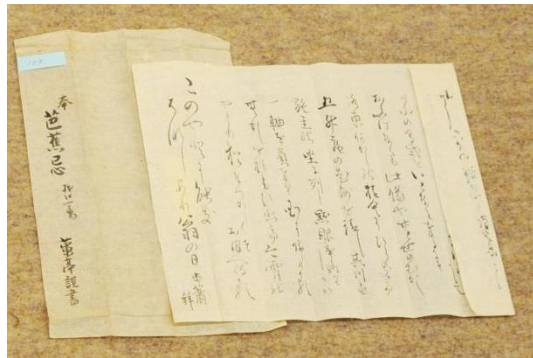
【飛驒人物事典】

二 加藤歩簫

○俳句他 2 通(まち博蔵)



○奉 芭蕉忌(協会蔵)



かとうほしろう

〔加藤歩簫〕

寛保三年(一七四三)四月、文政十年(一八二七)十二月十四日

雲橋社中興の俳人で五世。高山二之町生まれ。玄俊の子。名は貴雄。通称は小三郎。号を蘭亭・志羅々翁・白翁・里秋。

五升庵蝶夢に俳諧を、伴蒿蹊に国学を学ぶ。父の私塾を継いで、田中大秀、赤田臥牛ら多くの俳人・学者を輩出。文化十三年(一八一六)西茂住の山峡に俳人・野沢凡兆の遺詠地を探し岸壁に「鷺の巢の樟の枯れ枝に日は入ぬ」を著し彫らせる。図書千余冊を収集して「雲橋社文庫」を開設。これは飛騨初の公開文庫。昭和三年(一九二八)に従五位を追贈される。墓は東山法華寺。

著書『紙魚のやとり』『ゆききの旅つと』『蘭亭尚齒卷』『よしなし草』など。

【飛騨人物事典】

うんきようしゃ

雲橋社

幕末紛乱の世に際し、雲橋社の耆宿前後調謝して、社運漸く衰頽に傾いたが、加藤 麴翁独り恬淡として杜童と共に残燈を守り俳統の維持に努めて來た、斯くて明治初期を過ぎて文運漸く振興し、桃村・周可・小湖・柄齊等相次きて社中の人となった。明治十九年（一八八六）福田蕉滴県会議員として岐阜市に往來したが、時の知事小崎我々亭、蕉滴に勧めて獅子門道統第十七世棚橋碌翁の門に入らしめた。爾來蕉滴・原長松・上木可中・日下部雨外・古島夕景・柿下得園・野中井蛙等と語らい瓢箪会を組織し、時々俳筵を開いた。然かし適当な指導者がないので、麴翁に請いて雲橋社第四世の立机式を挙げしめた。

奥村野秋歿後雲橋社文机空しく庫中に蔵せられること茲に三十二年、終始正風俳統を死守して來た麴翁・掃月の功績を思わねばならない。明治二十四年（一九〇一）十二月二十四日可中庵に於て瓢箪会の納会を開き、席上掃月・雨外を双方の代表とし、瓢箪会を雲橋社に併合する議を決し、爾來毎月二、三回俳席を開いて研究を継続した。

【高山市史】

うんきようしゃぶんこ

雲橋社文庫

加藤小三郎（歩簫）の自家に設立した文庫である。昭和三年四月「故加藤歩簫功績調査書」中関係事項原文のまゝ、次に記載する。天明四年より翁は、雲橋社文庫の設立を企図す。

「蘭亭遺稿」（前略）雲橋社文庫の設立を思ひ立ち、同人の協力を得て、蕉門七部を始め、十哲の諸集はいうも更なり、蕉門関係の書簿、地門の名著、歌書類等に亘りて蒐集したる数は、実に五百有余種、冊数一千余巻を超えたのである

る。中央文壇より多くの隔を持った飛驒の山の町の仕事として、昔こゝ迄成し遂げたのは真に成功といはねばならぬ。たけそれだけ、熱心な努力の傾倒を思はせるものがある。此雲橋社文庫は、一の私有文庫として設置したものにあらざして、実に公益的智識の宝庫として、公衆に開放し、広く一般の好学者に其の閲覧を許せしものにして、遠く京都より本文庫の蔵書を借覧したる礼状、今に加藤家に保存せらるゝ等を以て見れば、現今の図書館制度より尚簡易に、広く諸家に借覧を許したるものゝ如く、即ち飛驒における今日の図書館を天明の昔時に於て早く翁が実現したるものゝ、其の先見の明に敬服すると同時に其の企図の公共的になると、文教に貢献せる人格の閃きとを、この一事に於ても容易に窺知せらるべし。

尚本文庫は、俳書歌書の外に、国学・漢学・雑書をも蒐蔵したるものにして、当地の古本屋店頭に於て雲橋社文庫在印の古書籍、今に時々発見する事あれば、同文庫の蔵書に係りしものは相当多数に上りしものゝ如し。

【高山市史】

三 赤田臥牛

○臥牛集初編全5巻（個人蔵）



○臥牛自作の竹花入（個人蔵）



○真宗上人始過訪（個人蔵）



あかだがぎゅう

〔赤田臥牛〕

延享四年（一七四七）～文政五年（一八二三）七月二十二日

儒学者。高山一之町の人。初名は朱義、後に元義。字は伯宜。通称新助。号を臥牛山人・白雲山樵。酒造家の生まれ。信長に敗れた六角義弼の将・赤田信濃守の子孫という。

勝久寺の瑞雲雪峰に論孟と五経の句読を受ける。津野滄洲は臥牛の才能を惜しみ尾張の松平君山、浅井図南、江

戸の宇野明霞、館柳湾（飛驒郡代の元締手代で詩人）などに紹介した。これらに師事した臥牛は飛驒において不動の地位を築く。江村北海（江戸中期の漢詩人）の『日本詩選』（安永二年（一七七四））に詩四首が載る。文化二年（一八〇五）には官許を得て自邸に「静修館」を開く（飛驒地方での学問所の初め）。皇室を尊ぶ氣が篤く津野滄洲と図って「籠の渡し」と「藤橋」の二図を描き、菅原長親を経て天覧に供し、その光栄を喜び「懸度行」の長詩一編を発表。著書『臥牛集』。

せいしゅうかん

静修館

初名朱義、後元義と改めた。字は伯宜通称新助、臥牛山人と号した。延享四年（一七四七）生る。其家世々高山に在し釀酒業を営んだ。

幼より学を好むも郷党師無く出遊せんとするも父其行を喜ばなかった。津野滄州（高山人）は臥牛の才能を惜しみ、尾張の・松平君山・浅井図南・近江の龍草蘆等と通交せしめた。是より名声漸く奢はれた、臥牛年長するに従ひ学識益々進み、郷人多く其門に入つた。郡代田口五郎左衛門幕府の許可を得て臥牛の居宅脇に学塾を建てたのが静修館である。

臥牛漢学の造詣深いのみならず、皇室を尊崇する念願頗る篤い。會て津野滄州と謀り籠渡、藤橋の二図を作り、式部大輔菅原長親を経之を乙夜の覧に供し、其の嘉納せられしを聞き、懸度行の七言長古一編を賦して歓喜の情を述べた。

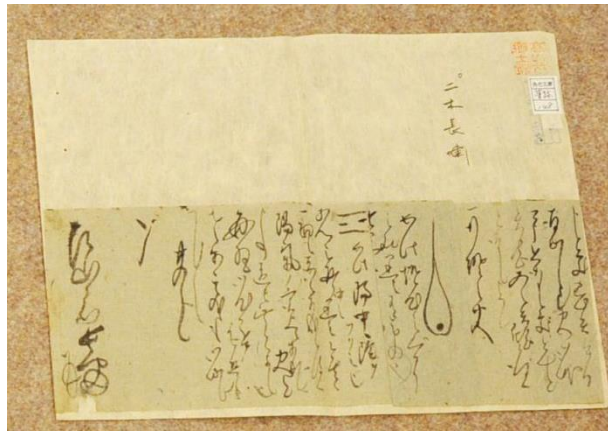
文政五年（一八二二）七月二十二日歿した。年七十六、文献矢生と謚した。墓は大雄寺山にある。遺稿臥牛集有名である。墓は岐阜県の史蹟に指定されている。

（濃飛文教史）

【飛驒人物事典】

四 二木長嘯

○書状(まち博蔵)



○屏風2枚折り(個人蔵)



に き ち よ う し ょ う

「二木長嘯」

宝暦五年(一七五五)二月二十六日〜文化十一年(一八二四)六月十日

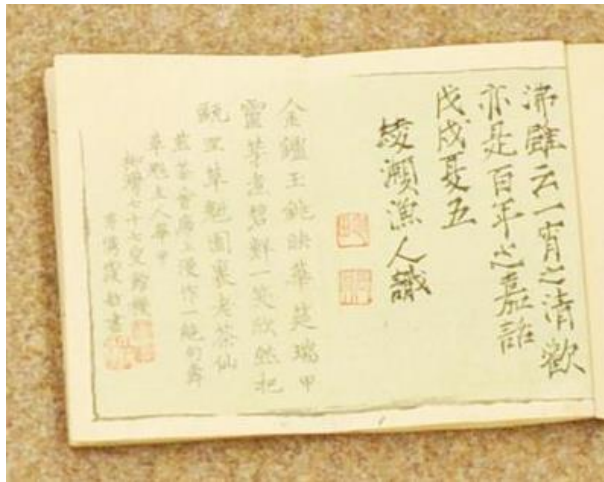
石器収集家・酒造業。二木家七代目。高山二之町の人。呂竹の長男。初名は孫三郎、後に俊恭。字は子敬。長右衛門と称する。

赤田臥牛と尾張藩の学者・松平君山に師事。心学に熱心で、人心を救おうと国内を一年余り巡る。石器収集家として日本的に著名で木内石亭と交わり、石器類五十点などが国重要美術品となる。久々野村木賊洞村の険路を改修。天明年間(一八一八〜一八二七)に白川郷で天然痘が発生すると、京都から薬を取り寄せて郷民を守る。絵をよくする。著書『神代石図』ほか。

【飛騨人物事典】

五 舘柳湾

○「文」(個人蔵)



た
ち
り
ゆ
う
わ
ん

〔舘柳湾〕

宝暦十二年(一七六三)三月十一日〜弘化元年(一八四〇)四月十三日

江戸中・後期の漢詩人。越後の人。通称は雄次郎。号は石香斎。字を枢卿。

寛政十二年(一八〇〇)四月に飛騨郡代・小出大助の元締として着任し、文化元年(一八〇四)退任。赤田臥牛らと交わる。著書『柳湾漁唱』には飛騨での作品が多い。編著『林園月令』。

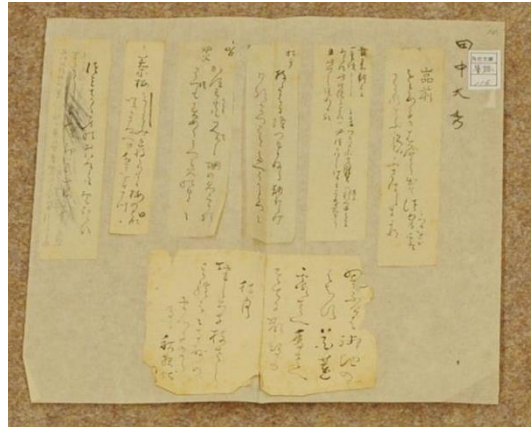
【飛騨人物事典】

六 田中大秀

○「竹取翁物語」(個人蔵)



○和歌(まち博蔵)



○「書」(個人蔵)



○「書」 大秀翁讀在靖筆 梅花図 (個人蔵)



咲にほふ
はなの百たひ
通来て
嘯ふき
遊ぶ
春の鳥
哉

○「書」 笹魚 北斎版画 大秀解書（個人蔵）



篠魚こそ、あやしき物にはありけれ。吉城郡高原郷のおくなる平湯のむらてふところのみにみむありて、此飛驒のくにのうちにてても、餘所においてふ事をきき〇きこえず。笹のものと節にはあらで、魚の形して成出たり。さみだれの雨を得て、谷水に落ひたりて、やがて鱗ふり出て、つひに、いはなといふ物になれりといへり。其若魚てうものは、鱗の子の二年へたるばかりにて、喰ふ味も見たるさまも、大かたますの子にかはれるところなきを、いささか文のたがへるなりけり。山河の岩間の測にすめば、然れば名にしよふなるべし。いたく年経たるは、三尺にあまるばかりなるもありとなむ。竹根の蟬となり、山薯〇のむなぎに成りてふたぐひ、たましいなきものの、魂ある物になれる例すくなくならねど、是はただそら言と強いていひくたすべきにもあらかじ。

いはなには またならずとも篠魚は

さつをすゝむる一ふしとなれ

荏野翁

たなかおおひで

〔田中大秀〕

安永六年（一七七七）八月十五日〜弘化四年（一八四七）九月十六日

国学者。高山一之町の薬種商の家に生まれる。通称は弥兵衛・平之丞。号を紀文。後に大秀と改める。別に八月満・湯津香木園、晩年は荏野翁・荏野老人・三酉。自庭を千種園と呼ぶ。

幼より読書詠歌を好み粟田知周、伴蒿蹊らに学ぶ。享和元年（一八〇一）本居宣長の門に入り、没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛驒に初めて国学を伝え、多くの門入を擁した。敬神勤皇の念篤く、文政元年（一八一〇）に荏名神社、同四年（一八二二）に飛驒総社を再興。歌学、管弦も教授。大正四年（一九一五）御即位の大典に当たり正五位。

著書『竹取翁物語解』『養老美泉弁』『荏野冊子』『土佐日記解』他。

【飛驒人物事典】

えなぶんこ
荏野文庫

田中大秀の江名子荏名神社境内に設けた文庫である。

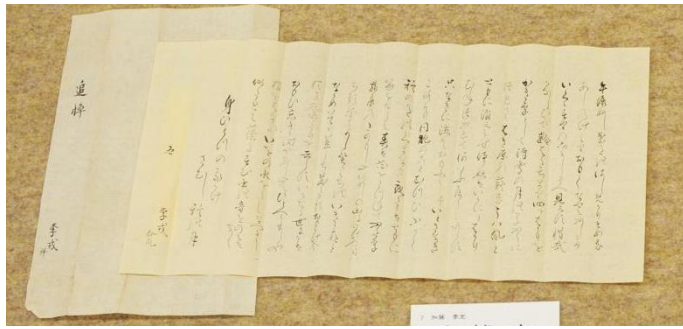
文化年間式内荏名神社を再興し、自ら神官となり、此処に居住して家を千種園と呼び、一生国学の研究に没頭せられ、文庫内に多くの著書及び蒐集の書籍を納められたものが、歿後何時しか其の全部を庫内より持出された。

大正元年文庫の遺書約一千四百冊を高山町教育会にて購入し、其後寄贈者もあり、香木園文庫目録を作製して研究する人の便に供して居る。

【高山市史】

七 加藤李充

○追悼文（協会蔵）



かとうりじゅう

〔加藤李充〕

安永七年（一七八八）十二月二日～嘉永二年（一八四九）四月二十五日

雲橋社七世の俳人。高山二之町村の人。歩簫の長男。幼名は太次郎。通称を正次郎・小三郎。名は清雄。号を蘭亭李充（戎）・柏翁。

書道、国学、雅楽を好み特に飛騨の雅楽振興に功績を残す。

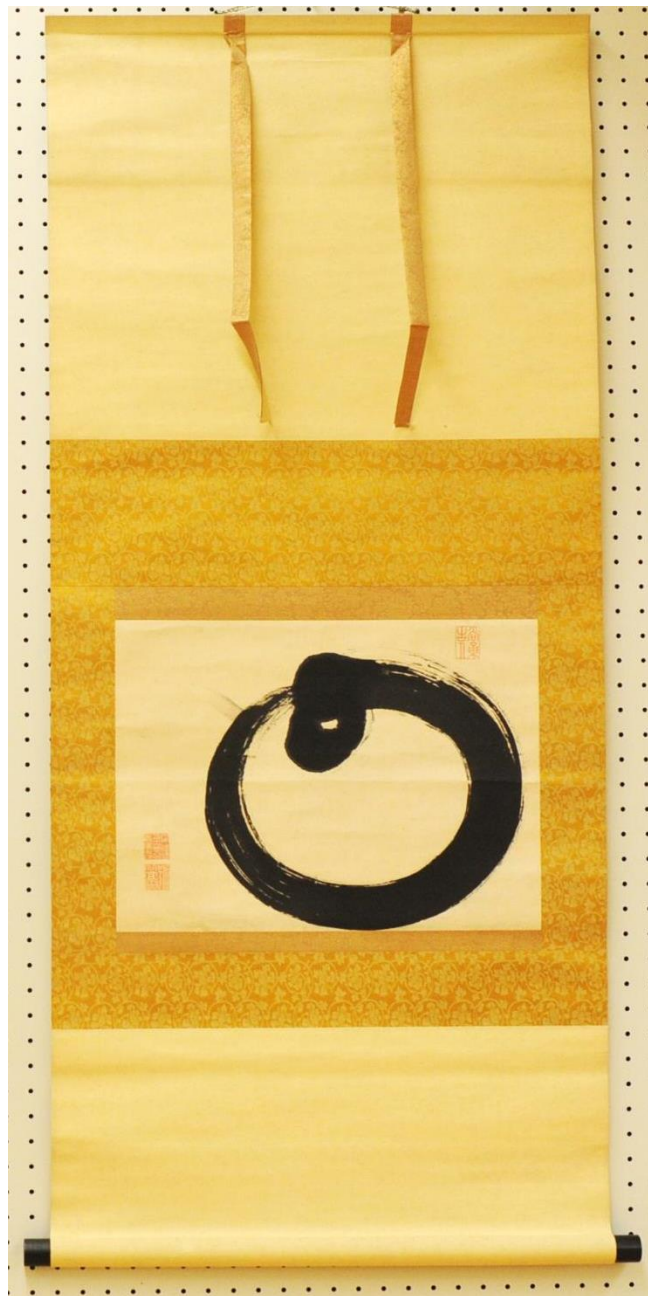
【飛騨人物事典】

八 岩佐一亭

○委蛇(個人蔵)



○円相(個人蔵)



いわさいいつてい

〔岩佐一亭〕

安永八年(一七七九)八月二十四日〜安政五年(一八五八)十一月二十八日

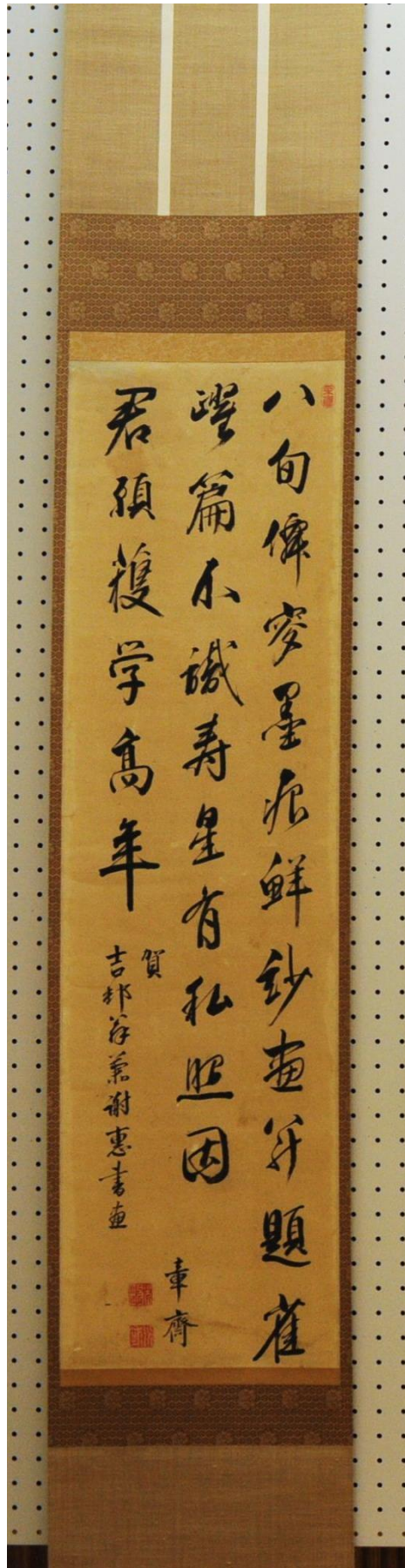
書家。高山三之町の呉服商・荒木屋に生まれる。通称は市右衛門。名は善倫。字は君明。号を喬村堂。

八賀屋仁助(牧牛舎裡布)に書を学ぶ。後に弘法大師流入木道五十世で尾張蜂須賀の蓮華寺住職・大道定慶の内弟子となり、大師流書道を修業し入木道五十一世。天保三年(一八三二)上京して「松聲」の二字を絹本に揮毫し、仁孝天皇に捧上。山岡鉄舟の師。

【飛騨人物事典】

九 赤田章斎

○東都館柳灣先生所贈恵 「書」(個人蔵)



あかだしようさい

〔赤田章斎〕

天明四年(一七八四)～弘化二年(一八四五)九月二十九日

儒学者。赤田臥牛の嫡子。名は光暢。字は永和。通称を新助。幼名は貞吉。鉅埜逸民・公茂と号する。

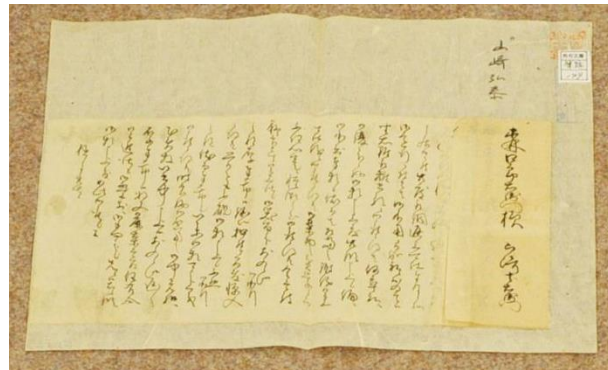
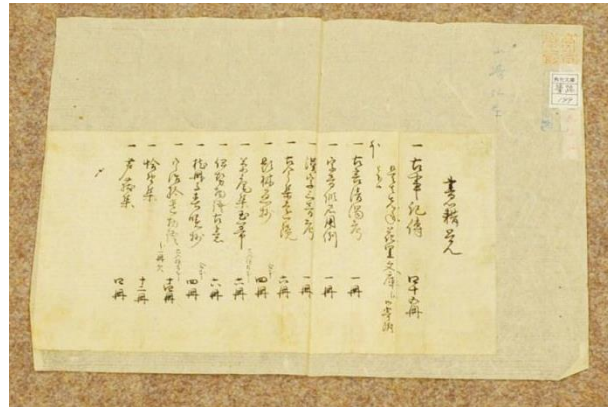
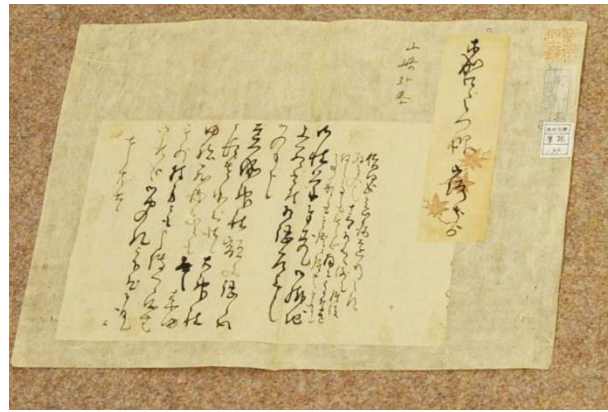
臥牛の教えを受け、文政元年(一一八)から父に代わって静修館の教授。天保三年(一八三三)十一月の大火で静修館が焼失したため高山馬場通り海老坂上に再興し、飛騨国中教授所として郷村を巡回教授。弘化元年(一八四〇)九月には神明町角に移築。詩文、絵画にも優れ敬神の念が篤かった。

花里天満宮に本人の識した退筆塚がある。

【飛騨人物事典】

十 山崎弘泰

○書籍覚(まち博蔵)



やまざきひろやす

「山崎弘泰」

生年不詳、文久一年(一八六一)一月二日

高山の地役人・国学者。幼名は君泰。通称は十郎右衛門。号を螢園・花里翁・鯉斎。

田中大秀に学び国典を修め歌文に長ずる。高山の地役人で天保十三年(一八四二)に頭取に進む。弘化四年(一八四七)二月に田中大秀の文机を継ぎ荏門の学頭となる。後に花里村天満宮境内に花里文庫を設け、大秀の遺稿と蔵書を移して保管。

著書『螢園集』『高原日記』『山分衣』『螢園雜考』など。享年六十六。

【飛騨人物事典】

はなさとぶんこ

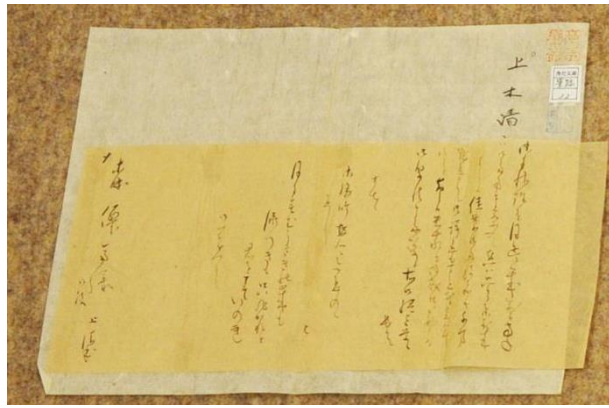
花里文庫

花里文庫は田中大秀の歿後山崎弘泰が花里村天満宮境内に設けた文庫である。荏野文庫蔵の書籍が何時しか花里文庫に移され、なお弘泰の私有書籍や他より借受けた書籍や寄贈を受けたものなど一時多くの蔵書が満たされてあつた事が察せられる。附近に弘泰の家があつて国学和歌の道を教へて居るし、漢学者の天満宮崇敬する人々によつて境内に申義堂(研究所)が建てられてあつた程であるから盛んに花里文庫の書籍が利用されたであらうことも察せられる。惜しい哉何時しか所蔵の書籍は散逸し今日は改造された神輿庫にわづかその名を留めて居るに過ぎない。又この文庫に関する文献も至つて少なく創設の事情継続年数などはつきりして居ない。然る処昭和二十一年十月中旬、森彦兵衛氏所蔵の文書や記録類中に山崎十郎左衛門(弘泰)から森四郎右衛門(宗倫)宛の書状があり、弘泰が森家より文庫へ古事記伝四十五冊の寄贈を受けて居り、なお外に古言清濁考以下十種五十九冊を借受けして居る事が判る。此の書状は嘉永元年の十月二十七日附のものであることもわかる。文庫へ古事記伝寄贈は先年とある故年号のわからぬは遺憾であるが、書状日附の若干年前なることは判然して居る。弘泰の花里文庫経営の一端を察し得る好史料であることを失はない。

【高山市史】

十一 上木清成

○森僊斎宛書状（まち博蔵）



うわぎきよなり

〔上木清成〕

寛政九年（一七九七）～文久二年（一八六二）四月八日

国学者で荏名門の四傑。名は重膺、幼名は太郎。号は倭文舎・春翁。通名を清九郎・甚四郎。上木重郷の長男。代々酒造業を営む高山の商家。国学を田中大秀に学ぶ。古典の研究、雅楽、謡曲、茶道に優れ多くの弟子を育てる。文久元年（一八六一）、不起の病と知ると門人を自邸に集め、富田礼彦に就いて学ぶよう言い聞かせ、礼彦を招いて師を交替する式を行なう。

著書『万葉集櫛之枝折』十五卷、『歌文集』十一卷。明治二十七年（一八九四）に孫の上木清根が遺稿を集め『倭文舎集』一卷を刊行。

【飛騨人物事典】

十二 富田礼彦

○白樗園詩抄初編（個人蔵）



○論語の一節（個人蔵）



不患人之不己知患
不知人也論語学而
人の己を知らざるを患へず人を知らざるを患ふ也

富田禮彦 節斎 白樗園

○明治維新政讃歌（個人蔵）



明治新政賛歌
御即位
くらゐ山みねにのぼりし初日かげ
ちとせの後も世を照さる成
元号改元
あきらかにをさめたまえる年号の
ことしや千代の初め成りけり
御誕辰
あれましてけふをいはひていでましの
にもみさやままひたりけん
山落葉
つりきてにしきふみわけ久田なり
もみぢちりしく山の柴へ

礼彦

とみたいやひこ

〔富田礼彦〕

文化八年（一八二二）二月二十九日～明治十年（一八七七）五月三日

国学者・高山県判事。高山の人。初名は定礼。通称は稲太。号を和郷・節斎・白椿園・南東与可楼。

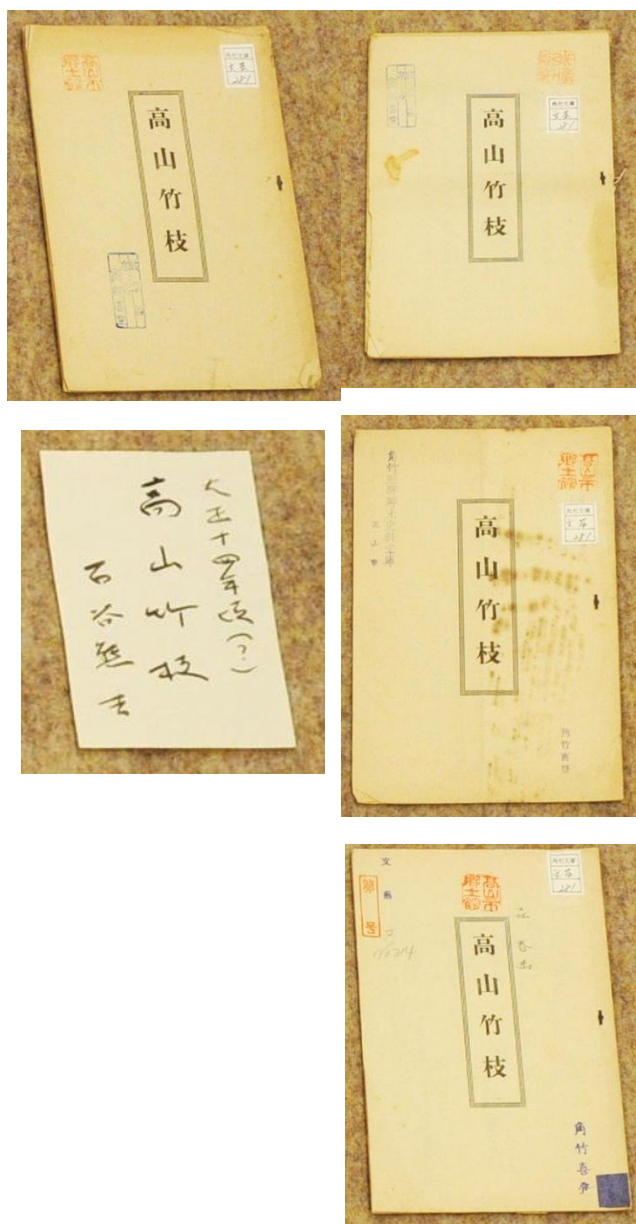
高山の地役人で頭取に進む。小野・飛騨郡代に薦めて飛騨各地に非常食糧を蓄えさせ、安政大地震で効果を見せる。明治元年（一八六八）に高山県判事となったが、梅村騒動が起こり、その責任を取って割腹したものの一命を取りとめる。田中大秀に国学を、赤田章斎に漢学を学ぶ。高山陣屋玄関の「天朝御用所」の看板は礼彦の筆。

『斐太後風土記』編纂主任。著書『運材図会』『三郡沿革』など多数。

【飛騨人物事典】

十三 森春涛

○高山竹枝(まち博蔵)



もりしゅんとう

「森春涛」

文政二年(一八一九)四月二日〜明治二十二年(一八八九)十一月二十一日

漢詩人。尾張一之宮の人。名は魯直。字は希黄。通称は浩甫。医師の森一鳥の子。

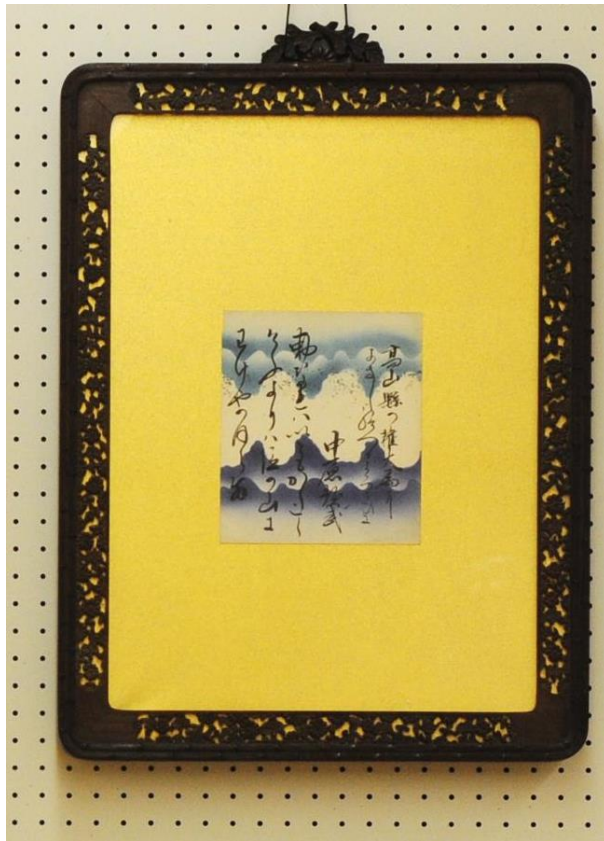
鷺津益斎に詩を学び梁川星巖によって詩名を現す。明治七年(一八七四)、東京へ出て茉莉吟社を興し多くの門人を育てる。八年(一八七五)に漢詩の専門雑誌の嚆矢とされる月刊『新文詩』を創刊。文久二年(一八六二)四月から六月に飛騨へ来遊し『高山竹枝』四十六首を作り版行する。

詩集『春涛詩鈔』『岐阜雑詩』。

【飛騨人物事典】

十四 吉住礼助

○「書」(個人蔵)



よしずみらいすけ

「吉住礼助」

文政四年(一八二二)三月～明治十三年(一八八〇)八月十六日

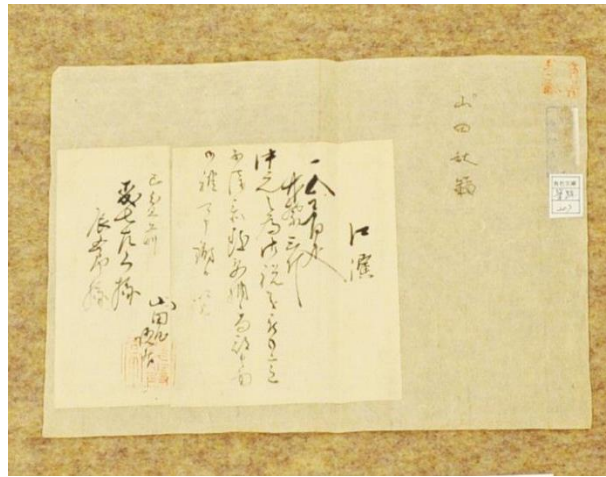
高山の地役人・高山県権大属。字は礼卿。号は松窓。頼武・長平と称する。高山県の勧農局と鉾山局の頭取などを歴任し、能登国穴水支庁長となる。明治十二年(一八九七)十二月から水無神社の宮司。梅村騒動の暴民を操った黒幕の一人とされる。

著書『梅村騒動実記』。

【飛騨人物事典】

十五 山田秋籟

○森七左衛門、辰五郎宛口演（まち博蔵）



やまだしゅうらい

「山田秋籟」

文政五年（一八二二）一月五日～明治三年（一八七〇）十月八日

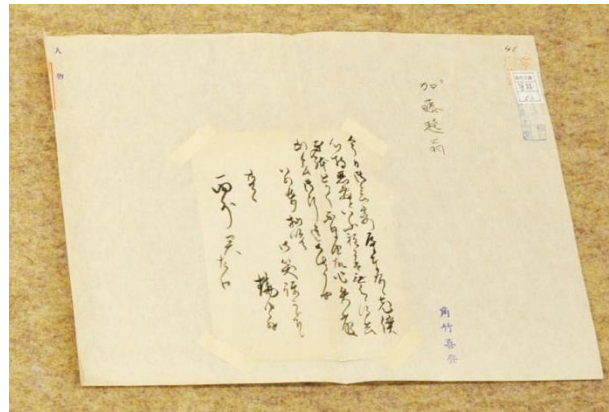
私塾教師。高山の人。本姓は船津町の広田で、高山の医師・山田泰安の養子。名は葆光。字は敏民。号を蠖斎。京都で梁川星巖に学ぶ。高山に塾を開いて句読書算を指導。『康熙字典』をすべて記憶したといわれる。

【飛騨人物事典】

十六

加藤 越翁

○雨外宛書状（まち博蔵）



かとうぎようおう

〔加藤 越翁〕

文政六年（一八一三）七月六日〜明治三十四年（一九〇一）三月一日

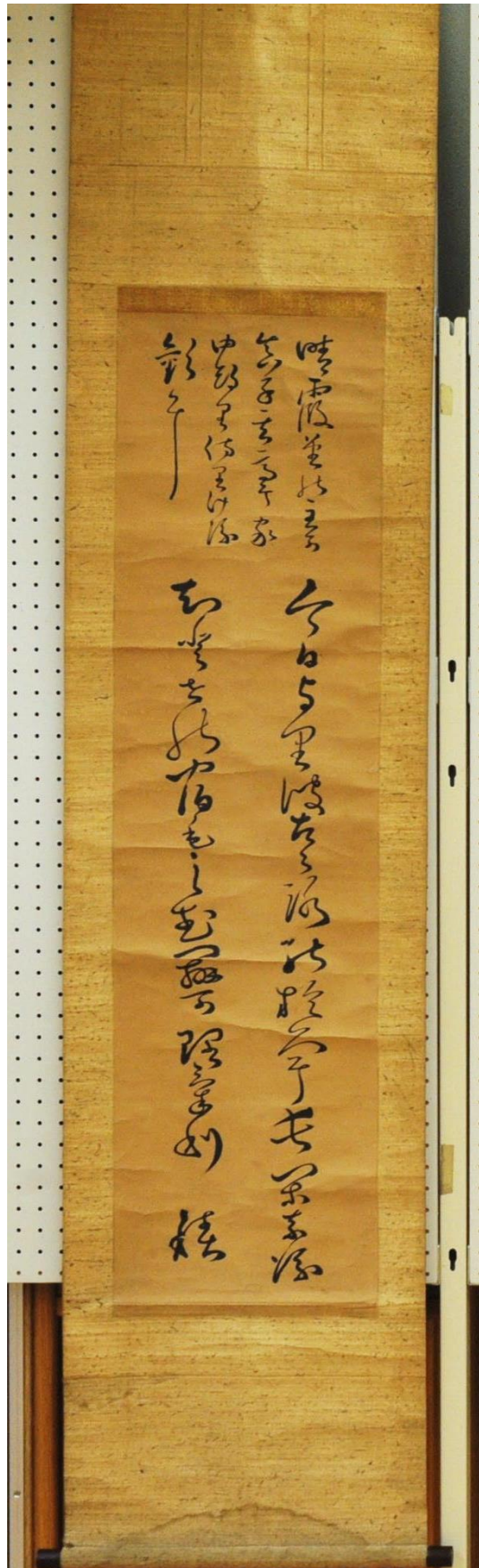
雲橋社八世の俳人。高山の人。加藤歩簫の孫。幼名を仙太郎、後に正次郎。通称は得三郎。名は丕雄。号を荷肅・羅耳亭・蘭亭珂咲。

田中大秀に雅楽を学び和歌も好む。

【飛騨人物事典】

十七 宮原大輔

○「歌」(個人蔵)



「宮原大輔」

みやはらだいすけ

生年不詳、明治十七年(一八八四)九月五日

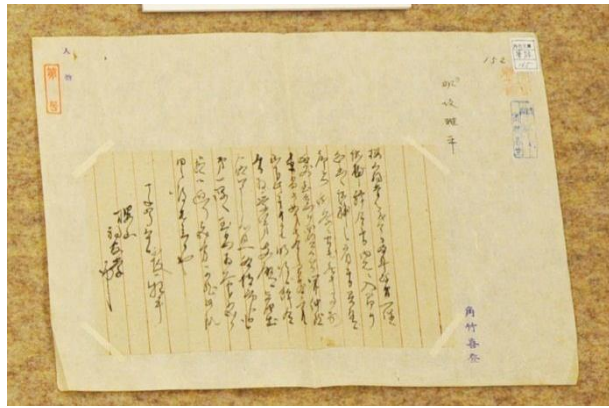
高山県権知事。もと因州鳥取の藩士。後に積と改名。号は海宇。

梅村・高山県知事が失脚し、明治二年(一八六九)三月に監察司として高山へ派遣され、判事を経て権知事。梅村騒動の原因となった県政を改めて民心の安定を図る。四年(一八七〇)十一月二十日、高山県が廃され福島県権令となる。富田礼彦に『斐太後風土記』の編纂を命じる。詩歌、文章に長じ学問所「思誠館」を開く。『海宇遺稿』を門人の田中登がまとめる。享年六十二。

【飛騨人物事典】

十八 船坂雅平

○桜山祠官宛書状（まち博蔵）



ふなさかがへい

「船坂雅平」

文政八年（一八二五）十月十八日〜明治十三年（一八八〇）九月六日

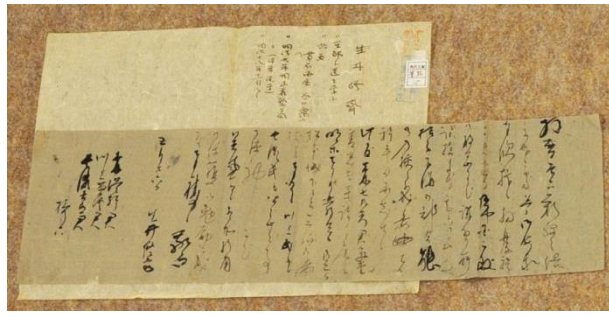
筑摩県二十五大区長・餅屋。高山の人。初名は半右衛門、のちに穆克。号を画餅・些庵・半門・桜南生。学識があり、韻事を好んで横笛の妙手。梅村知事の下で教諭方。明治六年（一八七三）四月に大区長。高山市助役、水無神社宮司、大野郡会議員など歴任。

著書『不可啖集』

【飛騨人物事典】

十九 生井修斎

○長瀬善右衛門他宛書状（まち博蔵）



いく いしゆさい

〔生井修斎〕

文政十一年（一八二八）十月～明治十八年（一八八五）十一月八日

教育者・医師。天性寺町の百姓・文蔵の長男。名は養。号は春坡・北山人・井蛙。

京都の安藤石見介らに医学を学び、安政六年（一八五九）九月から一之町で漢方内科を開業。慶応四年（一八六八）三月に陣屋御出入り医師となり苗字を許される。明治初年に私塾を開き、後に三輪源次郎と共に一之町に明正義塾を創設して洋学・漢学を講義。塾はこの年煥章学校と改称。鍵谷磯北が『華山新誌』を発刊すると春坡と号して参加。貫名海屋、谷口靄山に画法を学び俳句もよくする。

【飛騨人物事典】

めいせいぎじゅく

明正義塾

明治六年（一八七三）―同八年（一八七五） 明正義塾は生井修斎・三輪源次郎發起して創設したもので、換章学校の前身ともいえる。

三輪源次郎―明治六年（一八七三）高山町に於て明正義塾（学校）自分外二名にて發起相開、同八年（一八七五）右明正義塾換章学校と改称。寄附金として百円を納む筑摩県より銀盃一個を賜はる。（鉾業身元調に拠る）

明治六年（一八七三）四月三十日 元新宮藩中川八郎、高山一之町明正義塾に於て、毎日英語教授を始めた。

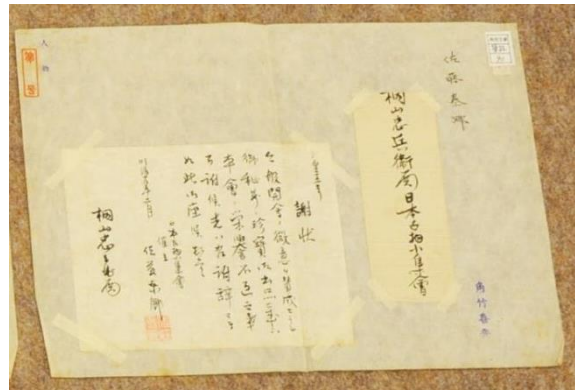
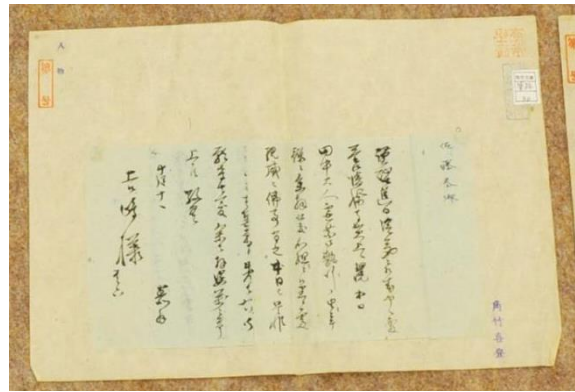
権典事殿方奇留旧新宮藩中川八郎来る五月二日より明正義塾迄出張毎日午後一時より五時迄英語学教授有之候に付有志のもの共入門いたし候様市中へ可触示旨高山町戸長副へ相達候事（明治六年御布告）

飯田権典事殿方奇留旧新宮藩中川八郎当五月二日より午後一時より五時迄日々一之町明正義塾へ出張英語学教授に付有志の者は入門いたし可申旨御沙汰有之候事但日曜日は休日の事

【高山市史】

二十 佐藤泰郷

○桐山忠兵衛宛書状他2通（まち博蔵）



さとうやすさと

〔佐藤泰郷〕

文政十一年（一八二八）二月七日〜明治三十四年（一九〇二）十一月十日

飛驒の考古学の先覚者・歌人。古川町方村大野村生まれ。幼名は泰太郎。泰彦・彦太郎・彦左衛門と称する。号を董園・董菜園。

田中大秀と蒲八十村に師事して皇国の古典、歌道を学ぶ。考古学に傾倒し、古川町のみつつか古墳から出土した馬具を研究して明治十六年（一八八三）『上町の古墳』をまとめる。十七年（一八八四）三月には国府町三川の剣緒神社古墳出土の土器、古川町向町の五阿弥塚の石室の測図をする。日本の古墳研究の先駆者でもある。慶応二年（一八六六）に生系改肝煎。明治元年（一八六八）には高山県の勧農方となり帯刀を許される。

著書『千代の鏡二帖』

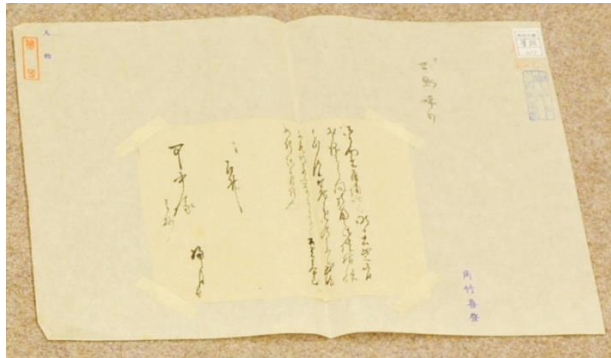
【飛驒人物事典】

二十一 吉島掃月

○室石田(木団扇)(個人蔵)



○可中宛書状(まち博蔵)



よしじまそうげつ

〔吉島掃月〕

文政十一年(一八二八)十一月四日〜明治三十九年(一九〇六)五月十三日

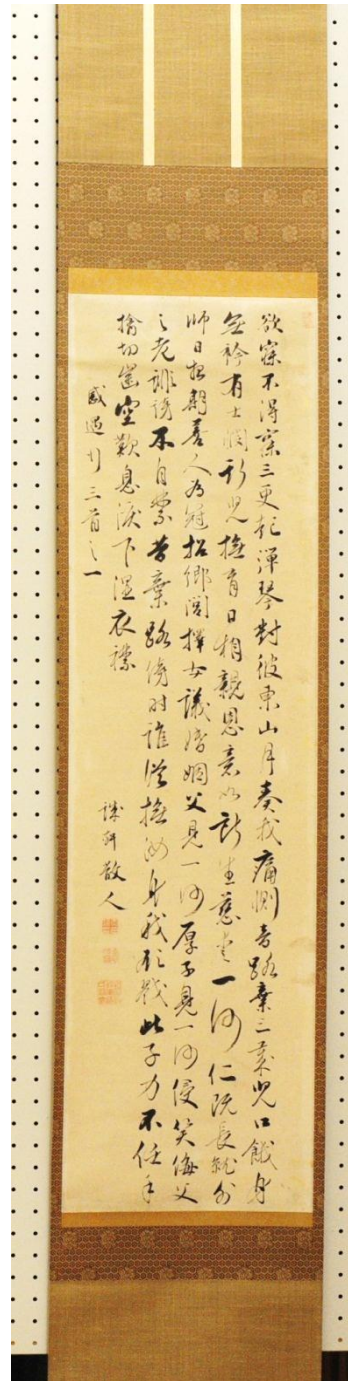
俳人・酒造業・戸長・組頭。高山下二之町の人。分家「中吉」を継ぐ。本姓は名古屋の堀田。名は正純。号は掃月庵・露翠・林董。通名は清一。清兵衛を襲名。

名古屋藩校で史書を学ぶ。第三区戸長、二之町組頭。和歌をよくし、俳句では雲橋社九世宗匠。

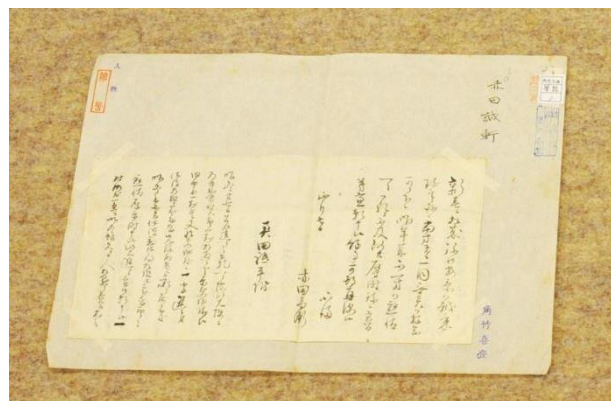
【飛騨人物事典】

二十二 赤田誠軒

○「書」(個人蔵)



○奥田祇平宛書状(まち博蔵)



あかだせいけん

〔赤田誠軒〕

天保二年(一八三一)七月〜明治六年(一八七三)五月二十七日

高山県の学問教授方。章斎の嫡子。名は昭・商衡。字は伯瓊・子黄。通称を新助・晋助。明治元年(一八六八)に瑛次郎、三年(一八七〇)に雌雄五郎、四年(一八七二)に瓊次郎と改名。

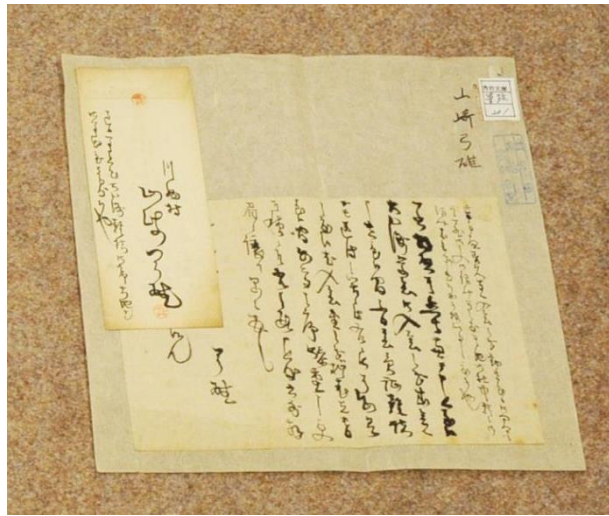
父祖の業を継いで嘉永三年(一八五〇)十九歳で静修館において「左氏伝」を開講。明治元年(一八六八)、高山県知事の梅村速水から学問取締方を命じられたが、梅村の治政方針に合わず館を閉じ、平泉瑛次郎と改め、川原町の村瀬恒右衛門方に同居し素読指南に従事。その後古川へ移住し加賀、能登へ遊学。病を得て高山に没する。

著書多数。

【飛騨人物事典】

二十三 山崎弓雄

○吉島休兵衛宛書状（まち博蔵）



やまざき ゆみお

「山崎弓雄」

生年不詳〜明治三十年（一八九七）一月二十日

歌人・地役入・神職。山崎弘泰の長男。幼名は冬吉、後に貫一郎。号は桜桃園・蕃田翁。

父に国学を、田中大秀に国学と和歌を学ぶ。文久元年（一八六一）、父の後を継いで荏野文机を受け、墨縄会を設けて門人を指導。高山の地役入、高山県の文学係と京都詰などを歴任。

著書『蕃田歌文集』。享年六十四。

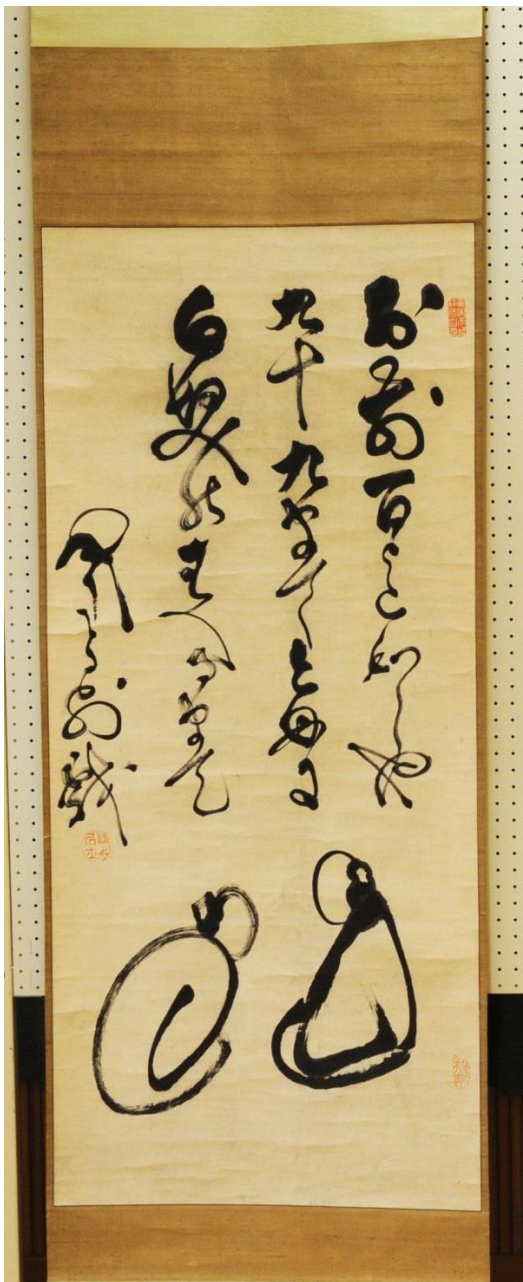
【飛驒人物事典】

二十四 山岡鉄舟

○一行書（個人蔵）



○「書」（まち博蔵）



ていせいちくがいたんきやくのつる
庭萩竹外堪客鶴

鉄舟高歩書

庭の池の周囲に竹藪があつて、その池へ鶴が
飛んできた。まことにめでたい風景を読んだ一
首である。（七言の句）

やまおかてつしゅう

「山岡鉄舟」

天保七（一八三六）六月十日～明治二十一年（一八八八）七月十九日

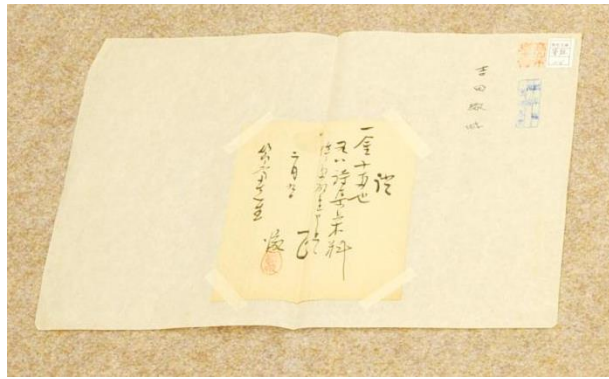
政治家・書家・剣術家。江戸生まれ。二十一代飛騨郡代・小野高福の長男。名は高歩。字は眩野。通称は鉄太郎。号を一楽斎。

弘化二年（一八四五）飛騨郡代として赴任した父に同行し、少年時代を高山に過ごす。書を岩佐一亭、剣を江戸から招いた井上清虎に、国学を富田礼彦に学ぶ。嘉永五年（一八五三）父が死去し江戸へ帰る。剣を千葉周作に、槍を山岡静山の下で修業し、静山の急逝によって同家へ入婿。翌年、講武所剣術世話役。文久二年（一八六二）に浪士隊新徴組の取締役となり上洛。徳川慶喜の特旨を受けて西郷隆盛に面会し、江戸城無血開城の道を開くことに貢献。維新後は新政府に出仕し明治天皇の侍従、宮内少輔、元老院議官など歴任。幕末の三舟の一人と称せられる。従三位、子爵。

【飛騨人物事典】

二十五 吉田文助

○節齋宛證（まち博蔵）



よしだぶんすけ

〔吉田文助〕

天保十一年（一八四〇）五月十八日〜明治三年（一八七〇）七月十日

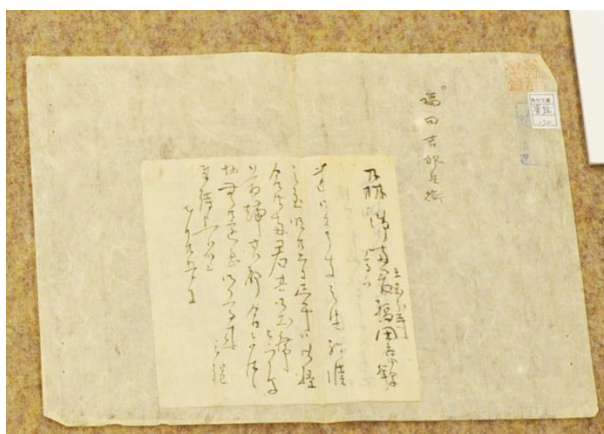
高山県判事・勤皇の志士。高原郷吉田の常蓮寺了生の三男。幼名は藤丸。名は清徹。号は繖城・雪岳・春橋。徹次郎・高原敬之進・藍民部などの別名を持つ。

豊後日田で広瀬淡窓の咸宜園に漢学を学び、約四年後には塾総監となる。勤皇の志士として活動し、慶応二年（一八六六）に同志と日田郡代の襲撃を企てるが、事前に発覚して逃れる。維新後は高山県判事に登用されるが、梅村騒動で免職。東京伝馬町牢に収監され未決のまま獄死。

【飛騨人物事典】

二十六 福田吉郎兵衛

○森宛書状（まち博蔵）



ふくだきちろるべえ

〔福田吉郎兵衛〕

生年不詳（明治二十五年（一八九二）九月十七日

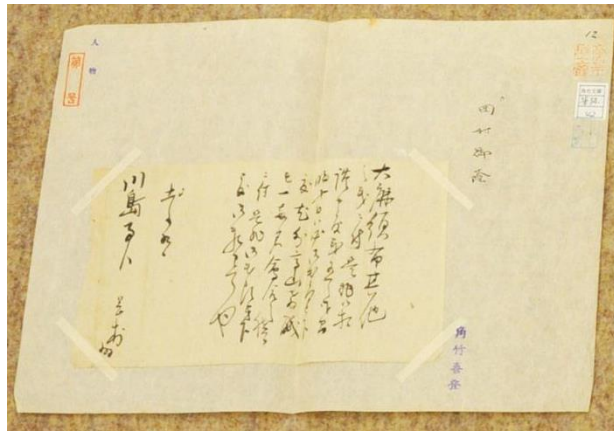
高山町長・茶人・俳人。高山大新町生まれ。福田益斉の長子。名は敦雄。字は竹厓。号を蕉滴・朴堂・壺中庵・可適斎。

漢籍を修め篆刻と茶道に長じ、茶道は門入が多かった。雲橋社の俳人。明治十二年（一八七九）から県会議員。享年五十三。

【飛騨人物事典】

二十七 川島小泉

○書状（まち博蔵）



かわしましやうせん

〔川島小泉〕

弘化三年（一八四六）一月二十五日〜明治三十五年（一九〇二）五月二日

漢学者。高山の人。名は柔。字を兆仙。通名は忠平。桐山力所の三男で川島家を継ぐ。

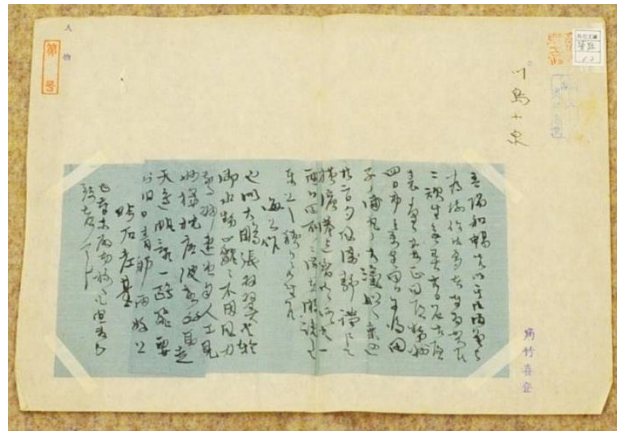
詩文を劉石舟や森春濤に学び、書道も巧み。町吏・神職・教職にもつく。

著書『緑漪園詩妙』。

【飛騨人物事典】

二十八 岡村御蔭

○川島宛書状（まち博蔵）



おかむらみかげ

〔岡村御蔭〕

弘化四年（一八四七）五月十三日〜明治四十一年（一九〇八）八月二十七日

神道家。吉城郡広瀬町村生まれ。国府村の利右衛門秋寿の二男。一時期、高山の池戸庄八郎の養子となる。のち分家して高山町西町に住む。名は文平・俊夏。幼名は豊次郎。号を真洞居・穀園・柳窩・清晨庵夢香。

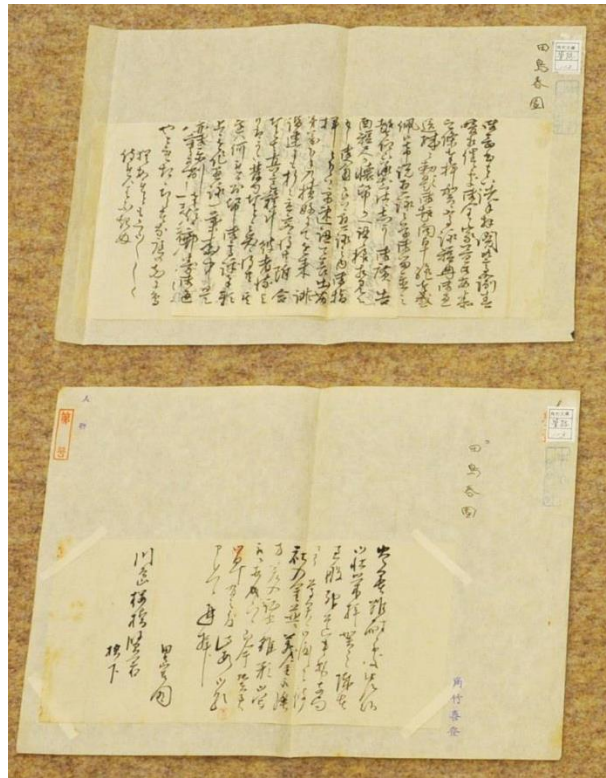
高山県知事・宮原積と東京の飯田年平に国学を学ぶ。飛騨国神道事務分局長、飛騨国県社以下神職取締所長など歴任。大講義。国学和歌に造詣深く、歴史の考証に長じ、川柳の門人も多かった。

著書『穀園前集』『真洞居中集』ほか。

【飛騨人物事典】

二十九 田島春園

○吉島千船宛書状他（まち博蔵）



たじまはるその

〔田島春園〕

嘉永二年（一八四九）八月～大正十四年（一九二五）九月十七日

歌人・郷土史家。高山の人。田島南岳の子。名は定孝。号は向陽居。通称を壮二郎。

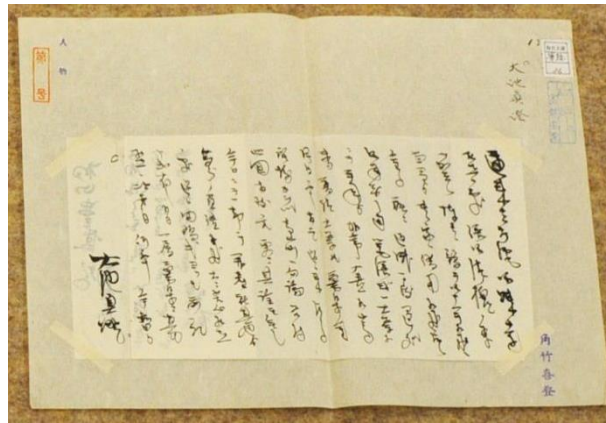
山崎弘泰に国学を、赤田章斎に漢学を学ぶ。飛騨総社の神職など歴任。大正七年（一九一八）には宮中歌会始に「海辺の松」の歌で予選に入選。

『岐阜県飛騨国大野郡史』の編纂委員。『飛騨古今人名辞典』『大野郡祭神記』などを編集。

【飛騨人物事典】

三十 大池真澄

○桐島忠兵衛宛書状（まち博蔵）



おおいけますみ

〔大池真澄〕

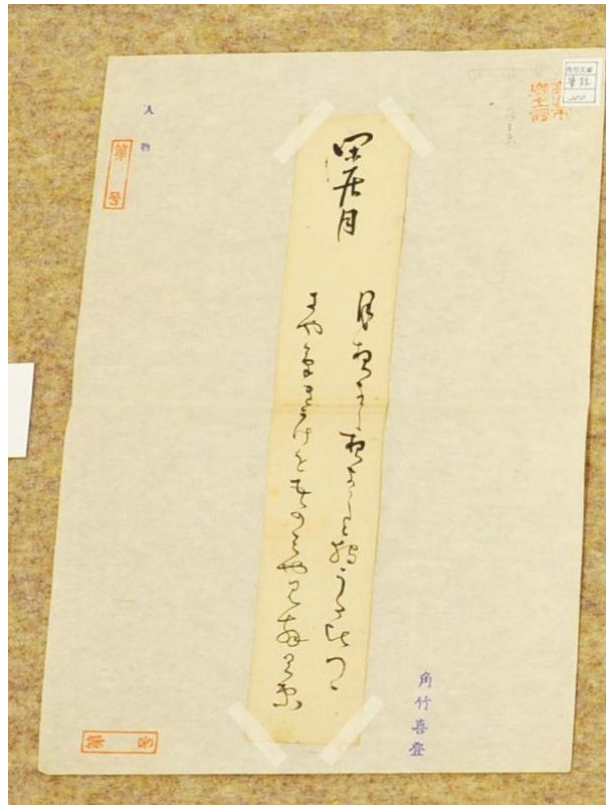
嘉永五年（一八五二）六月十五日〜大正十二年（一九二三）九月十八日

宮村の水無神社の宮司。高山町の士族・大池敏国の長男。可憐と称する。山崎弘泰に国学、和歌を学ぶ。敬神尊王の思想家として活動。

【飛騨人物事典】

三十一 山崎弓束

○和歌（まち博蔵）



やまざき ゆづか

「山崎弓束」

安政元年（一八五四）一月～明治四十三年（一九一〇）一月七日

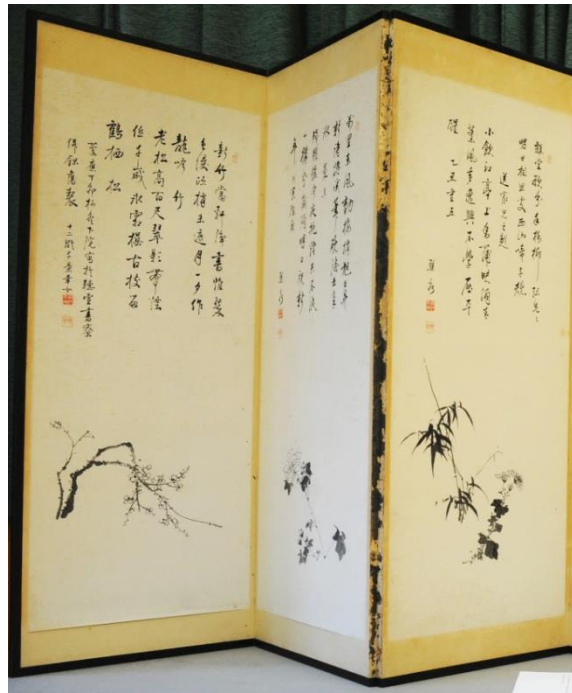
上枝村などの戸長・中学教員。高山の人。山崎弘泰の二男。

飯田年来に学び歌文をよくし雅楽を好む。能書でもある。戸長、神職を経て斐太中学、葦崎中学などの教師。
著書『俗語辞解』。

【飛騨人物事典】

三十二 白川琴水

○屏風6曲1双（琴水、7才から書き留めた漢詩を12才で清書したもの）（願生寺蔵）



しらかわきんすい

〔白川琴水〕

安政三年（一八五六）八月十日〜明治二十三年（一八九〇）九月一日

女流詩人。白川慈撰の二女。名は幸。

十三歳で高山県知事・梅村速水に嫁すが一か月ほどで実家へ帰る。大阪集成学校を経て京都府女学校に入学し、助教授となる。傍ら菊池三溪に詩を、村田香谷に絵を学ぶ。京都博覧会に油絵を出品し銅牌を受賞。中国で刊行の『日本同人詩選』などに詩が掲載される。明治十三年（一八八〇）に名古屋の青木家へ嫁ぐ。歌誌『明鏡』主宰の青木穠子は長女。

著書『琴水小稿』『日本烈女伝』。

【飛騨人物事典】

付記〈

第十七回 近代文学館作品展 ―幕末飛騨の書―

平成二十四年九月七日（金）～九日（日）

幕末から明治の初めに活躍した高山ゆかりの文人などにスポットを当て、遺されている書などを通じて、その人柄や功績を紹介しました。

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十五年三月発行

編集 社団法人高山市文化協会